

新聞閲覧

編集長が選ぶこのニュース



産地横断中小合同展に存在感

中小規模の産地合同展の存在感が増している。近畿経済産業局の認可を得て03年に発足した織物協同組合ジャクテックが主催する展示会や産地有志企業が結集した「テキスタイルネットワーク(TN)・東京展」は産地の枠を超えたテキスタイルメーカーが揃い注目を集めている。

(「織研新聞」)

コメント

これらの最大の特徴は短繊維から長繊維まで様々な素材が出揃い、幅広い提案ができる点だ。素材も綿、ウール、絹から化合繊維のспан、フィラメントまで揃い、アパレルの商品企画、仕入れ担当者にとっては、1会場で“すべて”を閲覧できることになる。

ジャクテックの展示会は参加企業が共通

する素材開発テーマを掲げ、統一感を持った素材提案で、来場者にアピールする。昨年末に行われた06~07秋冬展には18社が参加したが、出展各社は、先染め糸をさらにオーバーダイした原糸を使ったり、織り編み素材を製品段階で洗い加工して提案した。

テキスタイルネットワーク(TN)展は異なる産地の合同展としては草分け的存在だが、06~07秋冬展には15社が参加した。尾州産地から参加している梶浦はカシミヤ、アルパカ、タスマニアウールなどを使ったウール・獣毛混複合やウールシルク複合などを提案した。

尾州産地ではFDC主催の東京展が年2回開催されているが、他産地との“共演”も考慮の余地がある。

片岡毛織が3月末で廃業

尾州産地毛織物の草分け的存在である染色整理の片岡毛織が3月で自主廃業することになった。

コメント

同社は尾州毛織物の始祖とされる片岡春吉が1898年(明治31年)に創業した名門。染色整理のほか、毛織物製造、糸染めなど一貫体制で生産してきたが、ピーク時65億円に達していた年商は、2005年2月期には18億円に後退していた。片岡専務によると廃業の背景は 安価な輸入品の増大により、受注量と単価の下落が慢性的に続いている 染色整理や糸染めの主要なコスト要因である重油が高騰している そのコスト上昇を価格転嫁しづらい、など。

現在は受注残を消化しているが、今でもアザミ起毛機を保有するなど、尾州の技を先駆的に取り入れてきた企業だけに惜しむ声強い。創業以来の歴史的産業遺産については津島市片岡町に建設する事務所に残存部分を保管する方針。

